

シバの女王の国（元・1・21）

——北イエメンとエチオピアの話——

三木 一郎（昭9文甲）

本日はお歴々がお集まり下さいましたのに私は何の専門もございません。今までここでは大勢の家のついでに専門家がお話しされておる様でございます。実は京都の近くの向日市に河合さんと云う有名な陶芸家が居られ、そのご夫妻とは旅行仲間で中国、パキスタン、ソ連のシルクロードを旅行したんです。その時のメンバーはほとんどが専門家で家のついでにないのは私だけやなあと云って居りました。その奥さんはなかなかの才女でこの程、シルクロードの写真集を出版されました。その中の文章に「私はいい旅行仲間恵まれ画家、美術史家、建築家、彫刻家……とあり最後に旅行家」と書いてあるのです。私は家がついていないと云うたので、これはかわいそうやから何か家をつけてやれと云うことらしいです。しかし私は旅行家と云うほどの者ではございません。一九六九年、生産性本部の財經視察団の団長となって約二か月間、欧米の表街道を旅行しました。それで世界の表街道は大体こんなものかいなあと了解しました。一九七八年から

家内や旅行仲間と三十数回にわたり六十数か国、それも主として辺境の地を旅行いたしました。幸いその間夫婦共非常に健康に恵まれました。

今回もエチオピアからイエメンに行ったのですが、アフリカはこれが六回目です。夏ごろ銅野さんと云う女性の名コンダクターから電話があり、自分の方にエチオピア、イエメン行のメンバーが四、五人あるのですが、三木さんの方で三、四名出来ませんかと云うので、私は当方で三名引き受け、結局八名と銅野さんで出発することになりました。エチオピアに入国するため伊丹空港で黄熱病の予防注射を受け十一月十四日朝、成田空港から出発しました。

メンバーは流石に旅慣れた人ばかりです。東京の下町のおばあさんは八十一歳でなかなか元気で四千米、五千米のチベットとかヒマラヤやアンデスを歩き、イラン、イラク、アフガニスタンなんかも戦前に行ったとのことです。名古屋の女社長は荒海を乗りこえて南極に行ったことがあります、福岡の人はアフリカヘゴリラやピグミーを観に行ったとか、とにかく変わった連中ばかりです。成田から四時間半で北京に行き、そこで夕食をとり、夜、エチオピア航空に乗ります。これは余談ですが、ホテルでテレビをひねってみると女性プロが碁の高目定石の解説をしておりました。相当高級な解説で最近中国の碁の強いことの一端が解った様な気がいたしました。

北京を二十二時に出発しました。当初エチオピア航空を軽蔑してたんですが、向うの人に云わせるとエチオピア航空には四十年の歴史があるとのことで、日航とあまり変らんのじゃないかと

云うことです。

北京からは中国農村出の初めて飛行機に乗るような人が三十人ばかり乗っているのです、なぜこんな人がエチオピアに行くのかと不思議に思いましたが、この事は後でお話いたします。ボンベイに立寄り、一ねむりしてひよっと窓外を見ますと、丁度アラビヤ砂漠の夜明けで東の空が見事な真紅に染まっております。やがて緑がたくさん目に入って来ると間もなくアジスアベバに到着です。わりあい緑の多い所だなあと云う印象でした。

ところで皆さん、エチオピアには日本人は余り行ったことがないのです。商社の人とか、特殊な用件のある人しか行かない所で、我々エチオピアと云うと、まず頭に浮ぶのはマラソンのアベベキラが先頭をきって黙々と走っておった姿や、ハイシェラセと云う髭面の老皇帝の事、それから最近テレビのコマーシャルで船舶何とか会の偉い人が、砂漠で難民の子の頭を撫でている様な場面でございます。

エチオピアは面積百二十二万平方キロですから日本の約三倍あります。人口は四千万人、社会主義臨時軍事政権です。宗教はキリスト教が五十五%、イスラム教が四〇%、通貨はブルと云いドルの約二分の一です。言語はアムハラ語、時差は日本と六時間です。ここでは日本人は珍らしくて、こっちが見に行くのと逆に向うに見物されている様な事となるわけです。エチオピアと云うのはギリシャ語で「陽やけた顔」と云う意味やそうです。なる程向うの陽差しはきつくて我々

も黒くなります。首府のアジスアベバは二千四百米の高地にありますので炎天下は暑いですが日蔭は涼しいし、晩は寒い位です。

先程申したハイレシエラセは一九三〇年にイタリアを退げて即位したのですが、三六年ムツソリーニが侵入して来てイギリスに亡命しました。一九四一年に帰って来て皇帝になりましたが、七四年革命が起きて現在の社会主義になったのです。

エチオピアにはアビシニア高原と云う千米から二千四百米位の高原がありまして、中には数千米の高山もあります。アフリカ大地溝帯に沿ってタナ湖、青ナイル川があり、赤道近くの熱帯であっても高原は非常に涼しく、十月―二月は乾期で雨は殆んど降りません。南の方は砂漠です。

アジスアベバは人口二百万、これは「新しい花」と云う意味です。きれいな花が沢山咲いており、二千四百米と云うので最初は高度障害を心配しましたが、別にこれと云うことはございませぬ。ご参考までに高地にある空港を挙げてみますとペルーのクスコが三千四百米、メキシコシテイが二千二百米、南アフリカのヨハネスブルグが千八百米、ケニアのナイロビが千七百米、中国の蘭州が千五百米あります。

街をバスで通りますとユーカリが非常に多いので、そのわけを聞いてみると十九世紀に入ってメネルク二世と云う皇帝が、国の燃料不足を補うために成長の早い木を植えないかと云うこと



アジスアベバ Hilton ホテルのコーヒサービス

で、オーストラリアからユーカリを持って来て
沢山植樹しました。それで燃料不足は解消した
様であります。

街の人は割合親日的で現地ガイドのカサフン
さんは、我々の顔を見るなり天皇陛下のご病状
は如何ですかとお見舞を云いました。ホテルは
ヒルトンで非常に立派で設備、食事すべてOK
であります。しかし高度の為、階段を急いで上
るとすぐ息が切れます。それからお酒が非常に
よくまわり、私の友人は相当お酒の強い人です
が、ビール一本でもうくらくらして来たと言っ
ておりました。私なんかコップ一、二杯がやっ
とです。午後観光に出ましてハイレシエラ寺
院に行きました。ソ連が占領した様な所は寺院
とか街の名前までソ連風になっている所が多い
のですが、ここはやはり昔の皇帝を尊敬する様

な氣風が残っておる様です。二百万都市ですから街の中心地は相当近代化されておりますが、中心から一寸離れると全く田舎まちになり、ここに青空市場がありましてメルカドと云います。この市場ではスパイス、衣料、野菜、日用雑貨、陶器、牛、羊等々何でも売っており、その規模の大きい事、雑踏のすごい事、きたない事、大した物は売っていないこと、等々は世界一やないかと思ひます。翌日福岡の人がビデオ撮りに出かけたのですが、タクシーの運ちゃんが途中から帰らせてくれと云う。これ以上行くと車をつぶされるから勘忍してくれと云うのです。私もイスタンブールのグランドバザール、アルジェのカスバ、ダマスカス、チュニスのスーク等も歩きましたが、アベバのメルカド程きたなくてガチャガチャした市場ははじめてでした。

ところでエチオピア人はシバの女王の末裔、なぜ末裔かと云う話は後でしますが、末裔だけあって美人が多いです。天上の星の名前でもカシオペアとかアンドロメダとか云うのはエチオピアの王妃やその娘さんの名前だそうで、非常にスタイルがよく、スチュアデスなんか皆、背が高く、顔が小さく、足は細くて長く、ヒップが上っていると云う文字通りファッションモデルみたいな人が多いです。それから先程エチオピアの言葉はアムハラ語だと云いましたが、何か日本語と一寸似た様な言葉があり、美人と云う言葉はあまり云うと差し障りがありまして、ビジンと云うのはセックスの事らしいです。だから余り美人々と云えません。それから「あなた」のことは「アンタ」と云うのですが、「バック」と云うのはプリーズ、「コイ」と云うのはこっちへ来い

と云うのかと思ったら、そこで待っておれと云う意味なんです。だから「アンタ、バカ、コイ」と云うたら、あなたはそこで待っておりなさいと云うことで、貴方こっちへ来いと云うことではないのです。

翌日バハールダルと云う町へ飛行機でとびました。ここはタナ湖のほとりの小さい町で「川の町」と云う意味で、千九百米の高地です。アベバから四〇人乗り位の小さい飛行機でとんだのですが、二時間程遅れました。予定では青ナイル滝を観、その後タナ湖遊覧のつもりだったのですが、とてもそんな時間がありませんので、残念乍ら滝をあきらめてタナ湖に行きました。タナ湖は三千六百平方キロありますから琵琶湖の五倍以上あり、島が四十、僧院が六十あります。ここが青ナイル川の源で、ここからずっとエチオピアを通してスーダンに入り、白ナイルと合流してエジプトの方に流れるのです。

タナアイランドと云う三千人位住民のいる島へ着きました。藁ぶきの修道院でしたが内部には極彩色の立派な壁画がありました。我々がフーフー息を切らして石ころだらけの坂道を登るのですが、現地の子供達は水つぼを持って湖まで水を汲みに走ってゆきます。もっとよく探したらアベベの後継ぎになる様なマラソンランナーが大勢でてくるんじゃないかと思いました。

話を急ぎますが、次にゴンダールと云う町に飛びました。ここも二千二百米の高地にあり、着陸してみると滑走路の横に何やら飛行機の尾翼に似た記念碑の様なもの建っている。飛行機か

ら降りてよく観ると一週間程前に墜落した飛行機がさかたんぶりにひっくり返って、そのまま置いてあるのだした。ここはアベバが首都になるまでの首都でありまして、法律学校や宗教、音楽等の大学もある文化水準の高い所で、ゴンダールは紅海とスーダンを結ぶ昔のシルクロードの要衝の土地であります。

アベバに帰る飛行機に乗る時、我々の名コンダクターは早速機長に交渉しました、来がけに飛行機延着のため、我々は折角楽しみにしていたナイル大滝を観る事が出来なかった、甚だ残念である。だから帰る途中大滝の上を飛び、そこで一旋回してくれと頼んだら機長はOKで親切に滝の上で一旋回してくれました。この滝は非常に大きなもので世界で十指の中に入ると思います。因みに世界の大きい滝と云いますと、第一が南米にあるイグアスの滝、第二は南アフリカ・ジンバウエにあるヴィクトリア滝、第三がナイヤガラかと思えます。ルーズベルト夫人がイグアスの滝をみて、ナイヤガラがかわいそうやと云うた程ナイヤガラは小さいのです。

丁度十分でエチオピアの話を終りまして、この後約一時間イエメンの話をし、若干時間を余まして皆さんのご質問にお答えしたいと思います。

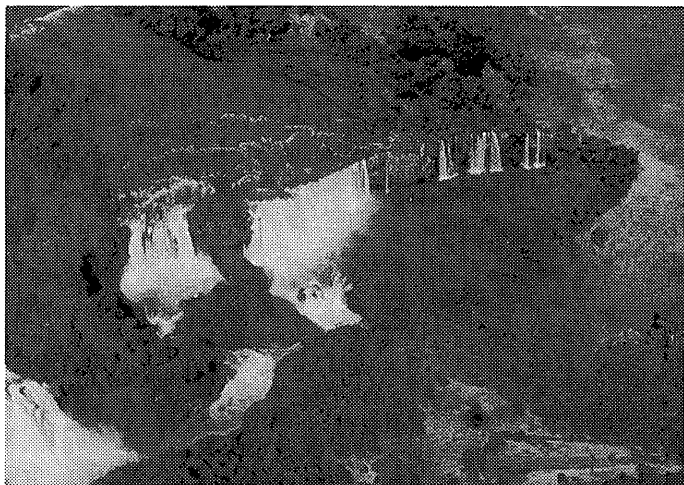
* * *

十九日にエチオピア航空でアジスアベバを発ち、アデンを経由して北イエメンの首都サナアに着きました。北イエメン共和国は十九万平方キロですから日本の半分位、人口は七百万、宗教は

イスラム教、言葉はアラビア語、通貨はリアル、リアルはドルの10分の1です。ホテルはシエラトンでアベバのヒルトンに劣らぬ立派なものです。通貨は普通銀行とかホテルのキャッシャーでチェンジするのですが、ここでは大きな袋をさげたおっさんがやって来ます。ガイドの話ではこの人に替えてもらおうと帰りがけに余ったリアルを文句なしにドルとチェンジして呉れるから便利



タナ湖の教会



青 ナ イ ル 滝

だと云うのです。三百ドル替えたら百枚綴の札束を三つくれるのですが、友人は丹念に札数を勘定して二枚足らぬと云うと直ぐ二枚出しました。私は間違いないと思ってポケットに入れましたが、よく勘定すると何枚か違っていたかもしれない、そんな両替屋です。

私は北イエメンの殆んど全土を歩いたわけですが、紅海沿岸の幅三十キロから六十キロの低い所はティハマと云います。高度は二百米以下で、ここは熱帯です。ティハマの東は二百米から五百米の丘陵地帯で亜熱帯です。その東の中央高山地帯は大体二千米から二千七百米位、ここにシュワイブ山と云う高い山があり、三千七百六十米ですから大体富士山と同じ高さです。それから東の方は砂漠で、ルーブル、ハリー砂漠です。

そういう国がありますが昔からイエメンのこの辺をハッピーアラビアと云うんです。私は今回の旅行まではその意味がわかりませんでした。大体アラビアと云うのは今でこそサウジアラビアなんかで石油が出て栄えているけれども、昔は不毛の土地で最もアンハッピーの所やないかと思っておったのです。ところがこの辺がハッピーアラビアです。イエメンと云うのは「右」の事らしいです、イスラムでは右手とか右側と云うのは尊いもので、左は不浄なんです。だから左手で握手したりなんかしたらとんでもない事です。子供の頭をなでてやるのも左手でやったら軽蔑してる事になって大変です。しかもこの辺では四月から十月頃まで雨が多く緑が多くなり、そのうえ国が栄えたからハッピーアラビアと云われるのは当然であり、この国では紀元前十世紀即ち現在から三千年前にシバの女王と云う絶世の美人の女王がおりました。大体アラビアとか中近東には美人の女王が多かったようです。

ご承知の如くエジプトには紀元少し前にクレオパトラがおり、シリアのバルミラと云うシルクロードで栄えた国にはゼノビアと云う美人の女王がおり、クレオパトラの後継ぎと云われたのです。その頃今のイスラエルにソロモンという王がおって栄華を極めた事はご承知のことと思います。シバの女王は大勢の随員を連れ、香料とか金、銀、宝物を持ってソロモンに会いに行きました。これは恐らく条約を結んで商売しようとする事だったらしいですが、ソロモンがどれ程の人物か試さないかと云うので非常な難問、奇問を携えて行ってそれを質問したところが、ソロモ

ンはたちどころに全部それに答えた。女王はこれは偉い男と思い条約を結ぼうとしたわけです。ところがソロモンは非常に女好きで七百人の側室を持つておったらしいですが、女王を非常に気に入る、何とか、ものにしようと思つてモーションをかけるのですが、色よい返事をして呉れない、遂に明日帰るという前夜、今晩中、私の持ち物に手をかけなかったら、そのままお帰りなさい、しかし私の持ち物に貴女が手をついたら私の云う事を聞いてくれと云う約束をしたんです。ソロモンは悪計をめぐらして夕食には何か辛い料理ばかりを食べさせたいらしい、女王は夜中に喉が渴いて仕方がないので水差しから水を汲んで飲んだ、そしてそこへソロモンが現れたという次第です。国に帰つてから子供を生んだのがメネルク一世で、これがエチオピアの建国の祖となるわけです。従つてエチオピアとイエメンと云うのは、まあ親子国家みたいな血の繋りがあります。エチオピアに美人が多いのもシバの女王の血が混ざつてゐるからかもしれないと云うことです。

なぜこんなイエメンが栄えたのか、石油も出ないシバの女王の国が栄えたかという事をもの本によつて調べてみますと、昔は海のシルクロードの要衝であつたわけです。ローマ、エジプト、エチオピア、紅海、それからアデンを経てペルシャ湾、インド洋、そしてインドから東洋の方へ行くのが海のシルクロードであります。その当時イエメンのシバの女王の連中は季節風つまり貿易風の事をよく知つておつたんです。そして貿易風を利用してインドの胡椒とかアラビアの乳香だとか、象牙、真珠、鼈甲、絹織物、陶器等をインドや東洋から持つて来て、それを如何にも

シバ王国の産物の如くローマ等に売って儲けたらしいです。そういう海のシルクロードの要衝に位置してローマあたりからはガラス器、銀器、ブドウ酒、銅、錫、鉛、或はローマの貨幣が沢山流れてきた様であります。ここに乳香のサンプルがありますが、今では市場で何百円程度ですが昔は金と同価格で交換された、それ程高いのです。又、胡椒がやっぱり金と同じ位の値打があり、あんなにガッツと匙ですくうんじゃなくて、一粒幾らで勘定しておつたらしい、それ位高いものです。

首都のサナーは二千三百五十米の高地にあり、何でか知りませんが、世界一古い町やということになっています。何を基準にしてそういうのか私ははっきり知りません。ノアの箱舟で知られるノアが作った町やと云うことになっております。ノアという人が実際、居ったのか、居らなかったのか、その辺、私は知りませんが、人口は四十二万です。イエメンで私は他国にない珍しい事を三つ発見しました。

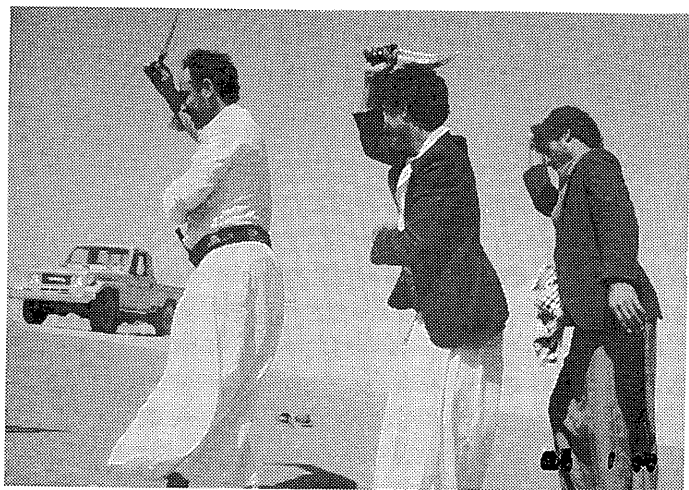
第一は建築の美であります。第二は男が今でも刀をさしていること、第三は男も女も「カート」と云う麻葉まがいの葉っぱを噛んでおると云う事です。

第一のイエメン建築と云いますと山岳地帯の非常に高い所に四階建とか、五階建の高層ビルが建っておりまして、それは個人の所有で数百年から千年位経っております。建物は玄武岩とか花

崗岩とか彩色レンガの組み合わせで建っており、窓には彩色ガラスをはめ、窓の廻りはアラバスタなんか使って、世界でまれに見る面白い建築だと思えます。実は明日、私の旅行仲間の建築家が来て私の写真によって建築の事を一回調べてみると云っております。

二番目の珍しい事ですが、男は五歳位からジャンビアという刀を差していますが、これがジャンビアです。こういう半月形で、これはよく切れる様になるんですが、わざと刃を落とさせて切れなくし、アクセサリーとして持って帰りました。これを差しとるわけです。これは一寸よいものです。これは腰のバンドで新しいもので、このバンドに輪差を作り、そこへ刀を差すのです。昔はこれで実際に切り合ったらしいが今は半アクセサリーです。これはバンドに付けておく小銭入で、このジャンビアを見ると大体その人の家柄だとか、身分、階級などが分るらしいです。立派なものはこういう所に金、銀や宝石を使って居り、何十万もするわけですが、これは銀製で三万位です。最近のものはここがプラスチックになり鞆は皮革になっています。第三番目のカートの事は後で話します。

愈々翌日からサナーを出発して山岳地帯を観光する事になったわけですが、二十人乗り位のバスを使うと全員一緒に乗れ、現地ガイドの英語を日本ガイドに通訳してもらいながらゆったり旅行できます。しかし私は二台のランドクルーザーに分乗した方がよいと主張しました、何故かと云うと、ランドクルーザーは非常に険しい所でも砂漠の起伏のきつい所でも少々危険を犯したら



ジャンピア踊り

どこへでも行けるのです。

二台に分乗して一週間旅行しました。ランドクルーザーはトヨタの新品で、私の車には現地ガイドが乗りました、マハディと云う三十五歳の男でアジスアベバの大学を出た大変なインテリで、分かり易い英語でいろいろのことを教えてくれました。ドライバーはモサエツトとマホメットの二人でした。モサエツトは四十五歳位の非常に真面目人間で、ただ貧乏やと聞いているのに腕を見ると二、三十万する様な金側のローレックスの時計をはめているんです。それからマホメットは若く見えるが四十歳で、これは非常に陽気なお洒落な男、おっちょこちょいで東京のおばあさんは「イカレボンチ」やと云うので、私たちは帰るまで「ボンチャン」く〜と云う仇名で呼んでおりました。陽気で多芸な男で、

ジャンビヤ踊りの名手で、晩には時々アルバイトでジャンビヤ持って劇場なんかへ踊りに行くらしいです。歌も非常に上手で、丁度、八木節みたいなテンポの早い歌を歌い出すのです。歌うのはいいんですが、ハンドルを叩き乍ら歌うものだから調子に乗ると両手離してハンドル叩いておる、それが何千米の断崖絶壁の上でやるから皆マホメットを敬遠します。しかしドライブは非常にうまいものでした。

そして午後になると先程云ったカートを噛むのです。又、彼は非常に女好きで町へ入ってきれいな女の人を通るとキョロキョロ脇見運転をします。もつと前見て運転せよと注意しました。『お前、奥さん何人持つてるんや』と聞いたたら、*“two”*、二人奥さんが居る。『子供は？』と聞いたたら、*“only eight”*と云うわけで、二人の奥さんと八人の子供を養っている。歌は上手、踊も上手、ものまねはうまいし、親切だが、ガイド曰く、『こいつは女好きやからこの間イタリー美人が来て横へ坐つたら、上つてしまい、タバコ捨てる時にライター捨てよつた』と、そんな面白い男でした。第三番目のカートのことですが、カートと云うのは丁度日本のお茶の様な灌木で、新芽の所の葉っぱのまだ青くなりきらん、やや紫がかった所を一枚一枚ちぎって、それを口へ入れるんです。片側の頬をプーとふくらませて入れておくのですが、しばらくして水を飲みますと、その汁が溶けて胃に入る、そうすると一種の覚醒剤、麻薬的な作用をする。エチオピアとかサウジアラビアでは禁止しておりますが、この国では軍人も警察官も商売人もドライバーも皆やっています。家に

よつてはカートルームというルームがあつて、午後一時頃から夕方までカートを噛みながら仕事もせずにボーと寝そべておる、この国では都会の入口、出口の検問が非常に厳しく、軍隊が銃を持って検問するんですが、その軍人が皆カートをやっておる、物を買ひに入ると商売人のおつさん皆カートです。

政府ではこんなにカートやってたら国が貧乏になると云うので、如何にしてカートを止めさすかと対策委員会やったら、午後になると委員会が皆カートをやり出して、どうにもならんと云うふうな話が残っています。但しここは禁酒国ですから楽しみがないんです、非常に封建的な国で、ジャンピアでも身分や地位がわかるという位で、山の高い所に大きな何階建の家を建てて住んでるのは大体いい所の衆です。次の階級はちよつと下つた所で畑をやっている、その同じ畑でも小麦なんかをやっているのはよい方で、野菜作りはそれより下等なのです。だから沢山土地を持ち小麦作つてゐる人が余つた土地で人を雇つて野菜でも作らしたらいと思ふけれども、野菜みたいな下等のものは作れんと云うて作りません。そういうふうな非常に封建的な国であり乍ら人間は陽気で、余り貯蓄心がないんです。明日は明日の風が吹くというわけのんびりしている、このボンチャンの如き、私、見てみると一日に七百円〜二千円位カートを買います。彼の日収をガイドに聞いたら千五百円位やと云う、一日七百円〜二千円のカート噛んで、家に二人の奥さんと八人の子供をどうして養つていくんか私にはさっぱり分りません。家庭経済も分らないが国家経済も

分りません。調べてみますと輸出は日本のお金で年に十三億円で、輸入が千三百億円、日本からが一番多くて二百五十億円輸入しています。車、機械、電機製品等です。家庭経済も分らんが、国家経済も分りません。これは左右両陣営を天秤にかけて両方からうまく援助を引っぱり出すと同時に、この国から他国へ出て成功している人が大分送金するらしいです。経済学者がもう少し調べてみたら面白いんじゃないかと思いました。ところがそんな国でありながら向うの雑誌で統計を見ますと、ここ数年の間に学校、病院等の施設が数倍にふくれ上っている、数倍と云っても元の数字が小さいですが、さっぱりわけが分りません。

翌日から大きいバッグはホテルに置いて三泊四日の旅に出ました、サナーからマナーハ、ホデイダ、ザビート、モカ、タイーズを一周します。マナーハは二千三百米、人口は一万、青空市場を見物しました、隣にハジャラと云う町があります、二千八百米の岩盤状の城壁に囲まれ、千年来の石造りの家がありますがみんな五、六階建であり、百五十軒位あり、村の入口の一所の門を閉じたら敵は攻めてこれんというふうになっております。ホデイダというのは港町で非常に暑く、現在は国際貿易港で輸出の4分の3はここから出ております。港へ行くと魚市場があり、大きな真赤なブリみたいな魚を買って行き、昼それをブツ切りにして油であげて食べたら割合美味しかったです。それから少し行きますとベタルファークーと云う織物の町があり、織物の町と云うから相当機械化されてるかと思つたら織機の両側に二人の男が坐っておって野球のボール位の

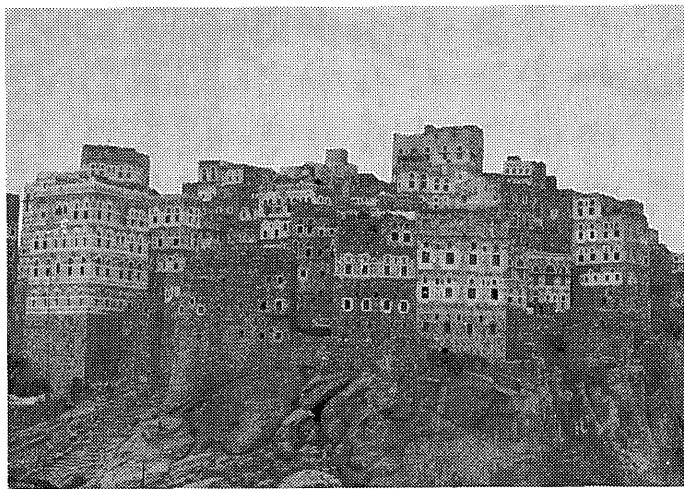
糸の玉をキャッチボールしながらやっておるのです。これがその辺の非常に原始的な木綿の織物です。買って帰って家の食堂の座ぶとんに仕立てて敷いています。次にザビートと云う町がありますが、ここは幾何学発祥の土地です。この辺りの幹線道路はきれいに舗装されていますが、これを行ったんでは面白くないので砂漠の中や砂浜を進んでモカに行ったのです。大ゆれにゆれて砂漠を通り砂浜を通って行くと、浦島太郎の亀みたいな大亀がお向けにひっくり返って手足を動かしている、ボンチャンがこのままでは漁師に食われてしまう、かわいそうやと車から降りて亀を裏返しにしてやりました。亀はいそいで海に飛び込み、ずーっと泳いで行きました。浦島太郎みたいな事をしたので何かいい事あるかいなと思っていたら、途端に車が砂浜にめり込んでしまった、亀のたたりじゃあるまいけれど一時間程かかって車を掘り出してモカへ行きました。

皆さんご承知の通りモカと云うのはモカコーヒーの原産地です。ところが今は全くさびれた寒村です。なぜさびれたかと云うと皆コーヒーを栽培するより先程のカートを栽培した方が儲かるから、カートに転向してしまい、折角の輸出産業のコーヒーが出なくなり、モカはさびれてしまったのです。

タイズと云うのは人口十万でこの辺の経済の中心地であり、十三世紀から十六世紀のイエメンの都であります。ここに大きな市場がありまして、そこでこのジャンビアを買いました。翌日タイズを出てジブラとイップを通りましたが、ジブラは昔ある女王が建設した都であり、六十



マナーハのバザール



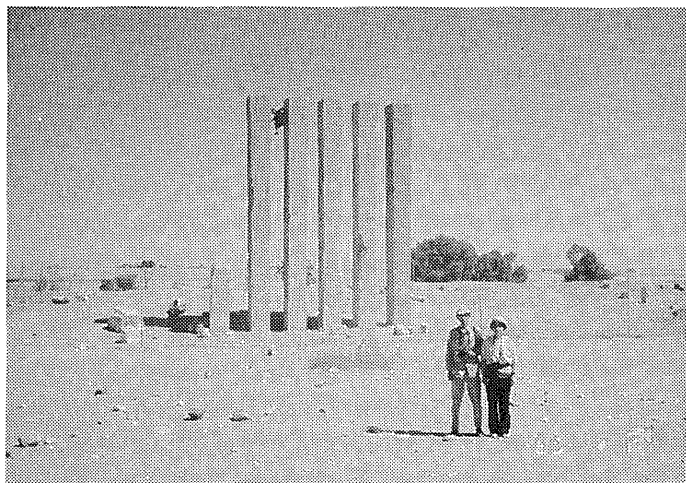
ハジャラの建物

余りのモスクがあります。イッブは石造りの高層建築の非常に美しい町でした。それから三千里級の峠を二つ越え、段々畑を見ながらサナーに帰ったわけで、それが三泊四日の旅です。

次に今度は日帰りでマアリブという所へ行きました。これが昔のシバの女王の都です。今はかなりいい道が通じているので車で行けますが、昔は本当の探險隊しか行けなかった砂漠の中で、ルーブル、ハーリー砂漠の入口にあります。その砂漠の砂はこんなきれいな砂で、地質学の先生だったら判ると思いますが、何やらキラキラ光った非常にきれいな砂です。私は拾い屋の如くいろんな物を拾って帰ります。砂や石や陶片などです。この砂漠の砂はこんなのですが、サハラ砂漠の砂、タクラマカン砂漠の砂、シリア砂漠、タール砂漠等砂漠によって砂の色、粒子、皆違います、そういう違った砂をビニールの袋に入れて持って帰ります。前にイスラエルの税関で石を沢山入れた箱を開けられ、これ何じゃと「石です」「日本には石はないのか」「日本は土地が狭いから少し国を大きくしたい」と云うとOKになりました。

その砂漠の入口に廃墟になった数十軒の集落がたり、かなり古いものですが、その集落の地下に紀元前千年〜三千年の古い部落が埋ってらしく、最近発掘にかかると云う話を聞きました。

紀元前八世紀にシバ王国は繁栄の頂点に達した様であり、ここに大貯水ダムがあり、農業が盛んで三十万の農民を養ったらしい、ところが敵国としてはそのダムを攻撃してつぶしにかかります。又時には大雨によってダムがこわれます、何回かダムがこわれ最初はそれを修理しておったので



マアリブのシバの女王宮殿

すが、終に修理するだけの経済力が無くなり、ダムがつぶれてしまった、同時にこの辺は砂漠化して繁栄は失われて行ったわけです。ところがアラブ首長国連邦のアブダビと云う所にマアリブ出身の成功者が居り、大金を出して大ダムを寄贈しました。これが一九八六年です。幅七百米、高さ六十米、二万ヘクタール、物凄く大きなダムです。不思議なことにビデオはいけません、写真はいくらでもお撮り下さいと、

アワム神殿とシバの女王の宮殿跡の柱を觀に行きました、立派な柱だけが残って居りますが、ボンチャンはおつちよこちよいですから柱と柱の間に背中与足をうまくつばって、柱の天辺に登ってみせてくれました、何でもやる男です。シバ王国没落の理由をもっと調べてみますと、最初貿易風のことを知っているのはイエメンだ

けだったので、季節風があると云う事を他の国もだんだん知るようになり、ローマ帝国でもイエメンを経由せずに直接インドと交易する様になり、イエメンはのけ者にされてしまった。それからコンスタンチンノーブル、その他の北の方のシルクロードが栄えた、又キリスト教がローマの国教になり、今迄宗教的儀式等に重要であつた乳香がいらなくなり、その値打ちが下つてしまい、以上の様なわけでシバ王国は次第に没落してしまつたのです。

一旦サナーに帰つて今度は又、一泊二日の旅に出ました、シーバン、コーカバンと云う兄弟都市があります。高さ五百米の大きな岩山があつてシーバンはその麓にあり、二千四百米、五千人位の人が農耕に従事している、コーカバンは山上二千九百米にあり、八百人おります。これは戦闘部隊です。平素は下の農作物なんかの食糧を山上に運んでやつておるが、一旦敵に攻められると山の上へ逃げ込みます、そして山道を閉鎖するとなかなか攻められない、たとえ攻めてもコーカバンの戦闘部隊がやつつけてくれる、現在でも年に一度シーバンの男は太鼓をたたきジャンピアを持って岩山をかけ登り、上でコーカバンの男と交歓のジャンピア踊りを踊つて帰ってくるのです。NHKはそれを取材に行った様です。シーバン、コーカバンはなかなか面白い所でした。次にハッジャと云う二千七百米の山岳都市に行きました。そこから帰る途中コホランという町の峠で停つた時に、ボンチャンが車から降りて断崖絶壁をズルズル降り出し、危いのと思つていたらこれを拾つて上つてきた、これは貝の化石です。これが沢山落ちていると云う事はこの辺二



コホラン近くの段々畠

「三千米あるけれども昔は海底であつたと云う事です。私はサハラ砂漠でもインドのタール砂漠でも貝の化石を拾いました。このアラビアもヒマラヤもサハラ砂漠も且ては海の底であつたと云う事の様であります。」

これで北イエメンの旅程を終り、サナーを出発、アジスアベバ、北京を経て成田に帰って参りました。帰りの飛行機にも中国の労働者が数十人乗ってるんです。この人達はエチオピアではなく北イエメンへ行ってるんです、何の目的かと云うと道路工事で、イエメンの幹線道路は全部舗装した立派な道ですが、その3分の1位は中国人の労働者が作ったのです。イエメンは貧乏なんだからカートなんか噛んで寝ころんでいないで道路工事やっတာいいと思うんですが、イエメン人は一定の指揮命令の元に組織的に仕

事をすると言ふ事が元来性に合わないらしいです。

二、三日前も私、テレビ観てたらサウジアラビアを放映していました、ここは朝鮮の人が皆工事やってるんです。この国は石油がでて大金持になったので朝鮮人を雇っていたのですが、だんだん石油は減産になり、値が下り、昔程石油が儲からん様になった、そこにやっぱり何十万の外国労働者がおると言ふ事は国の経済上やり切れない、外国人もつと帰つて呉れと思うのですがなかなか帰ってくれない、それと同じ様にこのイエメンでは中国労働者が道路工事をやっておるわけです。中国労働者にしてみたら月二、三万もらつたら大きな収入です。本国では月四、五千円がせいぜいです、喜んで来るわけです。これで私の話を終ります。

あと十五分位ありますが、ご質問がありましたらお答えしたいと思います。